
原著論文

高等学校「総合的な学習の時間」を活性化させる
校長及びミドルリーダー教員の役割

岩崎 保之

Roles of principals and middle-leader teachers
who try to activate “the integrated studies” in high school

Yasuyuki Iwasaki

The purpose of this study was to clarify the role played by principals and middle-leader class teachers in activating “integrated studies” throughout the whole school in several high schools.

Based on the word-for-word record of the interviews with five public high school principals and five middle-leader class teachers in high schools which have regular departments, we covered 1,918 sentences (738 paragraphs) spoken by principals and 1,966 sentences (880 paragraphs) spoken by middle-leader class teachers to perform quantitative text analysis.

As a result of the analysis, the following seven principal’s roles were obtained: “Cooperating with universities and specialized institutions”, “Coordinating with the community and providing information”, “Coordinating with the board of education and securing the budget”, “Providing research guidance and staff training”, “Building relationships of trust with the community”, “Involvement in regional issues”, and “Taking advantage of the PDCA cycle”.

In addition, the following five roles of middle-leader teachers were obtained: “Building relationships between the community and the school”, “Promoting the awareness of fellow teachers”, “Planning and building consensus”, “Practicing integrated studies”, and “Researching and developing regional issues”.

It was shown that both the principals and the middle-leader teachers made efforts to build relationships and trust with the community, and worked on educational practices while setting the community as the subject of inquiry-based cross-disciplinary study.

Keywords: the Period for Integrated Studies, Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study, activation, quantitative text analysis, area

1. 目的

高等学校では現在、新しい学習指導要領の完全実施に向けた移行措置に基づいて「総合的な探究の時間」（以下「総合的探究」と略記）をスタートさせている。

これまで続けられてきた「総合的な学習の時間」（以下「総合的学習」と略記）については、その成果を肯定的に評価する指摘がある一方で、実践上の課題や問題状況も指摘されている。

学習指導要領の改訂を答申した2016年12月の中央教育審議会答申においては、総合的学習の成果と課題について、「地域の活性化につながるような事例が生まれていて一方で、本来の趣旨を実現できていない学校も

あり、小・中学校の取組の成果の上に高等学校にふさわしい実践が十分展開されているとは言えない状況にある¹⁾と指摘している。

曾我は、高等学校における総合的学習の問題状況について、「各教師の個業では限界があり、組織的、計画的な取り組みが必須である」と指摘している。そして、教員を対象としたアンケート調査の分析に基づき、総合的学習を推進するための「組織体制の改善と組織文化の活性化」の「ストラテジー」を解明することを今後の研究課題の1つとして提起している²⁾。

小見は、総合的探究を推進する上での「問題構造」について、教員を対象としたアンケート調査の分析に基づき、「教員集団は余裕がなく、『総合的な探究の時間』に対する捉えや意識の足並みがそろっていない。さらに、外部との持続可能な協働体制が未整備のため、学校内で

業務を抱え、一部のできる人・意欲のある人に属人化している」と指摘している³⁾。

曾我や小見による指摘は、「総合」の推進が学校の活性化につながるという意識を校長及び教員で共有する必要があることや、外部との連携・協働も含めた組織体制を整備する必要があることで共通している。

総合的探究がスタートした今のタイミングを捉え、課題を解決したり、問題状況を変革したりする汎用的なストラテジーとタクティクスを開発することは、総合的探究を推進する上で意義あることである。

そこで、本研究では、総合的学習を学校全体で推進してきた高等学校の校長及びミドルリーダークラスの教員にアプローチし、同学習を活性化させるために担った役割とそこでの具体的な取組を明らかにする。

なお、総合的探究は総合的学習よりも探究的な活動が強調され、学習指導要領において目標や内容の取扱いなどが変更されている。しかしながら、新旧2つの「総合」を担当する教員は同じであることから、本研究では、総合的学習を活性化させる取組が総合的探究にも適用できるものとして考察を進める。

II. 方法

1. 用語の操作的定義

「活性化」とは、文部科学省において学習指導要領を解説する中で述べている『『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善⁴⁾』を学校全体で推進している状態とする。

また、「ミドルリーダー教員」は、2015年12月の中央教育審議会答申における「いわゆるミドルリーダークラスの教員」の定義に準じる。具体的には、概ね11年から15年の教職経験を持ち、経験の浅い教員を「指導し得る」立場にある中堅教員⁵⁾である。

2. データの収集

1) 概要

高等学校（中等教育学校後期課程を含む）の校長及びミドルリーダー教員を対象とした半構造化面接法によるインタビューを実施して、逐語録を作成した。

2) 研究参加者の選定

学校の教育実践を支援している特定非営利活動法人より、総合的学習を学校全体で推進している高等学校の校長及びミドルリーダー教員の紹介を受けた。そして、筆者の責任においてインタビューを依頼する校長及びミドルリーダー教員を5人ずつ選定した。

学校は普通科を設置している公立学校に限定し、学校種や学校規模、学校の所在地や立地、卒業生の進路につ

いてのバランスを考慮した。ミドルリーダー教員は、校務分掌で総合的学習を推進する部や委員会等の主任を務めた教員とした。

3) インタビューの方法

研究参加者には事前にインタビューガイドを渡し、資料等の準備を依頼した。

インタビュー項目は、プロフィール、総合的学習の意義と勤務校での取組状況、校長／ミドルリーダー教員としての役割や職務内容、成果と課題の認識であった。実際の調査では、それらの諸項目に準拠しつつ個別のケースに応じて適宜質問を行い、対話を深める形で実施した。

インタビューは、1人につき60分間程度、研究参加者の勤務先で個室を借りて実施した。研究参加者の承認を得た上で、インタビュアーである筆者と研究参加者との会話をICレコーダーに録音した。

インタビューを実施した期間は、2018年11月から2019年7月であった。

3. データの分析

ICレコーダーの音声記録を文字起こしした逐語録から研究参加者の発話のみを抜き出したテキストを、本研究で分析対象とするデータとした。

分析方法としては、テキストマイニングの方法の1つである計量テキスト分析を採用した。これは、「アンケート自由記述やインタビュー記録のようなテキスト型ないし文章型のデータを計量的に分析する方法」⁶⁾であり、社会科学において従来より行われてきている内容分析（content analysis）の考え方に依拠している。

実際の分析では、樋口⁷⁾が開発したフリーソフトウェアであるKH Coder（version 2.00f）を使用した。

KH Coderは、文章を単語ごとに分解してその出現頻度をカウントすることができるだけでなく、関連して使われている単語を距離として出力することもできるため、データの全体像を視覚的に把握できる。また、単語が使われている原文をソフトウェア上から確認することもできる。

4. 倫理的配慮

2018年度については筆者が当時所属していた新潟青陵大学の倫理審査委員会による承認（承認番号201804）を、2019年度以降については現在の所属機関である京都女子大学の臨床研究倫理審査委員会による許可（許可番号2019-1）を得て実施した。

研究参加者には、インタビューに先立って本研究の概要と倫理的配慮事項を記した文書を手渡して口頭で説明した後、同意書の提出をもって同意を確認した。

Ⅲ. 結果

1. データの概要

1) 研究参加者の属性

研究参加者の属性を表1に示す。校長のうち4人は、校長職として1校目であった。ミドルリーダー教員は、インタビュー対象となった取組の初年度における教員経験年数が平均19.2年($SD=10.6$)であった。経験年数が30年前後の教員が2人含まれたけれども、両教員の取組が本研究の目的に照らして有効であると判断したことから、研究参加者に含めた。

2) テキストの「前処理」

テキストを校長及びミドルリーダー教員の2つに分けて「前処理」を行った。前処理とは、分析対象ファイル内の文章から語を切り出したり、その結果をデータベースとして整理したりする処理⁸⁾のことである。その結果、校長は1,918文(738段落)が、ミドルリーダー教員は1,966文(880段落)が抽出された。

次に、KH Coderに含まれている形態素解析ソフトウェア「茶筌」を用いて複合語を検出した。その結果、校長は1,031語が、ミドルリーダー教員は898語が検出された。

表記揺れや同義語などの統一を図った後、品詞を限定(名詞、サ変名詞、形容動詞、副詞可能、未知語、タグ、動詞、形容詞、副詞)したり、強制的に抽出する語を設定(校長65語、ミドルリーダー教員74語)したりしながら前処理を繰り返した結果、分析対象とするテキストは、最終的に校長が2,113語に、ミドルリーダー教員が1,753語に集約された。

2. 探索的な分析

1) 職位による頻出語の異同

校長及びミドルリーダー教員について、データ全体がどのような語によって特徴づけられるかを把握するために、出現頻度の多い順に150語を抽出した。

表1 研究参加者の属性

職位	学校種	学校規模	主な進路	所在地	立地
校長	中等教育学校	小	進学	東日本	都市
	高等学校	大	就職／進学	東日本	都市
	高等学校	小	就職／進学	中日本	郊外
	中等教育学校	小	進学	東日本	都市
	高等学校	小	就職／進学	西日本	郊外
教諭	中等教育学校	小	進学	東日本	都市
	高等学校	大	進学	東日本	郊外
	高等学校	大	進学	東日本	都市
	中等教育学校	小	就職／進学	東日本	郊外
	高等学校	大	進学	西日本	郊外

校長及びミドルリーダー教員を比較したところ、「学校」「思う」「言う」「今」「生徒」「先生」「地域」など94語が共通して出現していた。

その一方で、校長及びミドルリーダー教員それぞれにのみ頻出していた語については、次のように確認した。

校長は、「職員」「協議」「職員会議」「教育委員会」など組織や校務に関する語や、「変える」「集める」など経営に関する語が上位に多く見られた。

ミドルリーダー教員は、「総合」「テーマ」「進路指導」「キャリア教育」など総合的学習に関連する語や、「難しい」「何とか」「思い」「大事」など教育実践に伴って生じる情意や価値に関する語が上位に多く見られた。

職位の違いによる取組内容の違いが、発話における頻出語の違いとなって表れていた。

2) クラスター分析

共通する抽出語を含んだ発話の組合せにはどのようなものがあるかを把握するために、校長及びミドルリーダー教員それぞれについて、Ward法、Jaccardによるクラスター分析を行った。集計単位は内容で発話を区切った「段落」とし、語の最小出現数は3とした。

段落の数の偏りを考慮したり、テキストで発話の内容を確認したりしながらクラスター数を変更して分析を繰り返した結果、校長は8つの、ミドルリーダー教員は5つのクラスターに併合された。

以下、クラスターの特徴語を「」に、クラスターを構成する段落の数を()に示す。

校長

- ①「研究主任」「教諭」「経験」「授業」「単元」など(210)
- ②「課題」「大学」「地域」など(159)
- ③「信頼」「関係」「協議」など(69)
- ④「生き残り」「過疎」「会社」など(30)
- ⑤「回る」「近隣」「根回し」など(28)
- ⑥「教育委員会」「予算」「職員」など(15)
- ⑦「続ける」「改善」など(6)
- ⑧「帰る」「感じ」など(7)

ミドルリーダー教員

- ①「学校」「地域」「関わり」など(278)
- ②「先生」「変える」「雰囲気」など(169)
- ③「会議」「計画」「合意」など(120)
- ④「総合的学習」「プロジェクト」「活動」など(53)
- ⑤「面白い」「使える」など(6)

なお、クラスターに分類されなかった段落数は、校長が214(30.0%)、ミドルリーダー教員が254(28.9%)であった。

3. 仮説検証的な分析

1) 分析方法の概要

前述したⅢ-2「探索的な分析」においては、抽出語の頻度と共起性に基づいてデータを分析し、全体としての特徴を把握した。

しかしながら、クラスターの中には段落数が少なかったり、特徴語だけでは内容が類推できなかつたりするものが残された。また、出現する頻度としては高くなかつた抽出語であっても、それを含む発話の中には、総合的学習の活性化につながった内容を示しているものも見られた。こうしたことから、探索的な分析だけで結論を得ることは不十分であり、データ全体を効率的に要約して整理する必要があると判断した。

そこで、探索的な分析で得られた頻出語やクラスターに準拠しつつ、総合的学習を活性化させるための校長らの役割を仮説として設定し、テキスト全体を「コーディング」して仮説検証的に分析することにした。

コーディングとは、コード（本研究では総合的学習を活性化させるための役割）に従って分類基準（コーディングルール）を作成し、それに基づいてデータを分類することである。

KH Coder によるコーディングは、「必ずしも頻度が高くなかつた抽出語、あるいはそれを含む文書でも、分析の中に取り込⁹⁾むことが可能になるだけでなく、コードの共起関係を視覚的に探索できるメリットがある。

2) 校長の役割と取組

A. 総合的学習を活性化させるための役割

総合的学習を活性化させるための校長の役割を7つ、仮説的にコードとして設定した。そして、コードを構成する抽出語を「or」で連結して、コーディングルールを

作成した（表2）。

その際、クラスター分析において段落数が少なかった⑦と⑧については、次のように取り扱った（発話からの引用における……は中略を、（ ）は注記を示す。抽出語には下線を付す。以下同じ）。

⑦については、「いいことは続けていくし……ちよつとずつの改善ですね」「（文化祭の後に）会議をやって……いろいろ改善することは山ほどあったので」という発話があるように、校長が計画→実施→評価→改善のPDCAサイクルを意識していたことを示していた。これは校長としての職務上、必須の取組であることから、仮説として残すことにした。

⑧については、「（地域住民は校長を）どうせ1年か2年で帰るんやろうっていつて、思っておるもんで」という発話があるように、校長として着任した当初、地域住民からの信頼を得ることに苦心したことを示していた。これは、③信頼・関係・協議などの前提となる問題状況を示していることから、⑧は③に取り込んで仮説化することにした。

次に、コーディングする単位を「段落」とし、テキストを単純集計した結果を表3に示す。表中の「頻度」は抽出語が出現した段落数を、「%」は全段落におけるその割合を示している。

「大学・専門機関との連携」「地域との調整・情報発信」「教育委員会との調整・予算確保」は、いずれも3割を超える頻度で出現していた。学校を代表したり、経営したりする立場として、学校外の組織や人と連携・調整・交渉したり、自校の総合的学習の成果を広報したりする役割を担っていた。

なお、いずれのコードにも該当しない「コード無し」

表2 コーディングルール（校長）

コード	抽出語
教育委員会との調整・予算確保	必要、聞く、付ける、自分、教育委員会、お願い、職員、前、行く、出す、学校、少ない、予算、欲しい、配る、探す、企画
地域との調整・情報発信	話、話す、一緒、出る、中心、地域、校長、行く、受ける、考える、ダメ、生徒、ウエルカム、アンテナ、目線、拠点、未来、回る、学年主任、近隣、根回し
大学・専門機関との連携	課題、探究、言う、年間、大学、地域、出る、生徒、生徒、自分、お金、勉強
PDCA サイクルの運用	PDCA、サイクル、続ける、改善、微妙、カリマネ
地域との信頼関係の構築	信頼、得る、関係、協議、教頭、変わる、地域、行事、受ける、駄目
地域課題への関与	防災、障害、徘徊、生き残り、過疎、会社、ボランティア、取り組む、課題、よそ者、入る、出る、取り組む、通報、提言、サポーター、見守る、跡地
研究指導・職員育成	研究主任、ゴール、学習、教諭、経験、問い、授業、単元、作る、計画、総合的な学習の時間、職員、職員会議、指導、新しい、研修、カリキュラム、関わる、段階、内容、選ぶ、育てる、文部科学省、運営委員、総合的な探究の時間

表3 コードの集計結果(校長)

コード	頻度	%
大学・専門機関との連携	239	32.4
地域との調整・情報発信	235	31.8
教育委員会との調整・予算確保	221	30.0
研究指導・職員育成	189	25.6
地域との信頼関係の構築	133	18.0
地域課題への関与	123	16.7
PDCA サイクルの運用	8	1.1
コード無し	342	46.3

の段落が、クラスター分析で分類されなかった段落を16.3%上回る結果となった。

B. 総合的な学習を活性化させる取組

コードにおける校長の具体的な取組について、Ⅲ—2—2)「クラスター分析」で示した特徴語を含む段落を中心に、校長の発言の一部をテキストから引用する。

取組1 大学・専門機関との連携

- ・大学の先生であったり、企業で研究をやっている人とつなげてあげられるようなものを作って……そういうふうな環境整備をしています。
- ・お互いに融通が図れないかっていうふうなところの大学との連携が1つ。もう1つは、同じようにWin-Winの関係っていうふうに考えたときに、〇〇市内の特に中小企業は非常に強いニーズを持っているということが分かりました。
- ・学校とコーディネーターと地域という3者だけでやっていたものに対して、今年は大学の先生にもたくさん入っていただいて、探究の質を上げるための厳しいアドバイスをあえて受けていこうと。

取組2 地域との調整・情報発信

- ・情報をやっぱり結構入れてた、その地域のね。そういったこともあって、「1回ちょっと会わせてよ」と言っていたら、(地域組織の)会長さんと事務局長が一緒に来て、「いろんな情報を共有しましょうね」なんて言って話をしてて。
- ・地域からも応援してもらえて。新聞とか、市の広報誌とかもよく取り上げてくれるようになったので。それで「〇〇高校、元気あるね」みたいな感じのことを聞くと、先生方も前向きになってきたかな。
- ・学校独自の取組でしたが、近隣他校の生徒にもどうぞっていうふうに声掛けをして……〇〇市内からも来てもらったりしていました。

取組3 教育委員会との調整・予算確保

- ・ICT環境の整備も赴任以来、もう4月から方針は出して、5月の段階で具体的な整備計画を運営委員会、職

員会議に出すというふうな形で、これは教育委員会とも協議をしました。

- ・様々な事業に手を挙げるってということでの研究予算を取っていく。科研費を取るような形ですよね。それをやる。

取組4 研究指導・職員育成

- ・授業も変えつつ、総合的な学習の時間も探究的なものにしようというふうに、まず内部環境を変えることを考えていますね。外部環境も併せてやった方がいいなっていうふうに判断したんですよ。
- ・来年の活動の核になる教頭、研究主任については、私と同行動で〇〇高等学校、〇〇高等学校、そして、最後に〇〇の本社に行って……特に課題の作り方というものをレクチャーいただきました。

取組5 地域との信頼関係の構築

- ・まず距離を縮めて姿を見てもらおうところからやりとりをしてもらって、やっぱり生徒との関係をしっかりとくっついていかないと、なかなか信頼を得られないっていうか、応援をしてもらえる関係にはならないのかなと。
- ・3回目の(地域との)協議会のときは、(総合的な学習の)報告会を見てもらったんですよ。そのファシリテーターをやってくれた〇〇さんが「ああ、いい感じやな」と思って……協議会の委員にも入ってもらったんですよ。

取組6 地域課題への関与

- ・地域との関係でいえば、防災なんかを、海が非常に近いので例えば津波災害とか、将来そういった災害に向けた対策を、防災拠点となる学校で地域をどう巻き込んでやるかみたいな発想も取り入れた道徳教育なんていうのをやろうと。
- ・地域も地元の〇〇町だけではなくて、生徒の8割が居住している〇〇町と〇〇市と〇〇市というふうに地域も広げたんですね。そのことによって8割が在住している地域の課題をよりリアルに伝えていただく機会を増やそうというふうに、毎年、生徒の探究が深まる環境を工夫しています。

取組7 PDCA サイクルの運用

- ・いいことは続けていくし、せっかくやっていることはもうちょっといいふうにならんかみたいな、そういう微妙な、微妙なっていうか、ちょっとずつの改善ですね。※前掲
- ・(文化祭の後に)会議をやって……いろいろ改善することは山ほどあったので。※前掲
- ・(活動する時間を確保するために)教育課程というか、カリマネのあれですね。だから、学校行事とかを見直して、生み出しています。

表4 コーディングルール（ミドルリーダー教員）

コード	抽出語
地域素材の研究・開拓	本当に、面白い、今、収穫、見本市、持続、SDGs、気付く、発展、使える、変わる、情報、取り組み、休暇、自分、工業、理想、一番、変わる、最初、プロジェクト、段階、大人、受け入れる、有名
総合的学習の実践	総合的学習、進路探究、プロジェクト、アクション、高校生、キャリア教育、ネットワーク、動く、担当、一緒、思い、自分、年間、計画、学年、活動、会議、ゴール、作る、仕事、話す、協力、課題、指導、総合的な学習の時間、取組、必要、学年、主任、協力、面白い
同僚教員の意識改革	学習指導要領、進路、大学、入試、変わる、探究、何とか、授業、校長、教務主任、主任、背中、押す、担任、大事、先生、変える、出る、時間、来年度、検討、雰囲気、会議、最初、気持ち、流れ、意識、関わる、渡す、作る、用意、教頭、ポイント、任せる、総合的な探究
計画立案・合意形成	会議、進路、指導、設定、動く、開く、スタート、放課後、時々、集める、大変、意見、難しい、学校、自分、予算、時間、考える、意識、お願い、計画、合意、連絡
地域と学校の関係構築	学校、生徒、地域、先生、関わる、入る、来る、出す、社会、探究、外部、提案、関わり、頑張る、意識、面白い、教員、お願い、変わる、作る、相談、一緒、関係

3) ミドルリーダー教員の役割と取組

A. 総合的学習を活性化させるための役割

総合的学習を活性化させるためのミドルリーダー教員の役割を5つ、仮説的にコードとして設定した。そして、各コードの特徴語の中から選択した抽出語を「or」で連結して、コーディングルールを作成した（表4）。

その際、クラスター分析において段落数が少なかった⑤については、「○○（地域名）にも結構魅力があるなとか、生徒たちも……教員も一緒に参加しまして、こういうの面白いねっていう声が少しずつ出てきました」という発言があるように、地域の魅力を探したり、地域のイベントに参加したりしたことを示していた。これは、総合的学習の具体的な内容を示していると推察できることから、仮説として残すことにした。

次に、前述した校長と同様にしてテキストを単純集計した結果を表5に示す。「地域と学校の関係構築」は4割を、「同僚教員の意識改革」「計画立案・合意形成」「総合的学習の実践」は3割を超える頻度で出現していた。総合的学習を実際に指導する立場として、地域との関係や校長・同僚教員との関係に留意しつつ、勤務校における教育実践をリードする役割を担っていた。

なお、「コード無し」の段落が、クラスター分析で分類されなかった段落を12.5%上回る結果となった。

B. 総合的学習を活性化させる取組

コードにおけるミドルリーダー教員の具体的な取組について、発言の一部をテキストから引用する。

取組1 地域と学校の関係構築

- ・実際に企業とか地域の方々から課題をもらって、それを生徒たちなりに考えて提案して、リアクションを受けるっていうのを見てこれだなと、この地域との関

表5 コードの集計結果（ミドルリーダー教員）

コード	頻度	%
地域と学校の関係構築	382	43.4
同僚教員の意識改革	308	35.0
計画立案・合意形成	302	34.3
総合的学習の実践	283	32.2
地域素材の研究・開拓	239	27.2
コード無し	364	41.4

り方がいになっていうのがあって。

- ・私、地域のことやろうと思ってから、地域の飲み会とかに結構行くようにしたんですよ。……私自身が地域のいろんな集まりに出ることによって、そこで人脈をつくっていったっていう感じですかね。

取組2 同僚教員の意識改革

- ・取りあえず全員でやるんだぞっていう意識を先生方に持ってもらうためにも、各教科にもし来年生徒に課題研究をさせるとしたら、どんなテーマが考えられますか。どんなテーマならやれそうですかっていうアンケートを出したんです。
- ・初めは年次進行説もあったんですけど、それだと私は進まないと思ったので、あえて全学年同時に……ぽっと始めようっていうふうにしたんですよ。そこは、ちょっとけんかみたいな議論もあったりしつつ。でも、私はそれを押し通したっていう感じでしたかね。

取組3 計画立案・合意形成

- ・校長から「そういうのを検討を始めるよ」と言ってもらって、ある程度まとまった年間計画とか、方針とかは、学校で運営委員というのを経て、職員会議に出しながら進めていましたかね。

- ・学校としての総合担当。それを是非、進路指導部に置いてくださってということ（校長に）お願いしたんです。……来年ぐらいは、もう各学年の副任の先生にそれぞれの総合担当を進路でやってもらって、打合せしながら進めていけたらなと。……そうすることで経験者がどんどん増えていくっていうか。

取組4 総合的学習の実践

- ・私がもう全部このワークシートと……これもう指導書ですよね、こんなふうにやってもらえればオーケーですみたいな。それから、誰がいつ駄目になっても大丈夫なように、毎時間の指導案ですよね……とにかくこれさえ見てもらえれば、事前に見てもらえればっていうのを毎回出すようにしてたんです。
- ・アクションプランを考えても、やっぱりすごい狭い世界の中で、視野の中で考えているなっていう感覚はあって。……アクションプランをもっと外の人と関わりながら、自分の将来のビジョン設計をするっていう目的感をもって1年間やってきました。これは初めからできると思ってたので、年間計画に基づいてっていうのは、多分道を切り開いてから形にしていくなっていう感覚もあって……1個1個実現してきたという感覚がありましたね。

取組5 地域素材の研究・開拓

- ・「〇〇（地域名）にも結構魅力があるなとか、生徒たちも……教員も一緒に参加しまして、こういうの面白いわねっていう声が少しずつ出てきました」※前掲
- ・学校の中って外の人には見えにくいじゃないですか。……（学校の）中の人間が外を見るべきなんだろうなって。それは前の学校からずっとその地域の人たちに電話をかけまくって、すごくそう思いました。

4) 役割相互の関連

A. コード間の類似度

これまでに述べてきたコード（総合的学習を活性化させるための役割）について、校長及びミドルリーダー教員それぞれで類似度行列を計算し、コード間の類似度を分析した。

その結果、校長は、取組1「大学・専門機関との連携」と取組2「地域との調整・情報発信」の間に比較的強い共起性（Jaccard 係数 0.60）が認められた。

また、ミドルリーダー教員は、取組1「地域と学校の関係構築」と取組2「同僚教員の意識改革」の間（Jaccard 係数 0.61）、取組1と取組3「計画立案・合意形成」の間（Jaccard 係数 0.57）、取組3と取組4「総合的学習の実践」の間（Jaccard 係数 0.50）にそれぞれ比較的強い共起性が認められた。

B. コード間の共起性

校長及びミドルリーダー教員それぞれにおけるコード間の共起性を「共起ネットワーク」を用いて示す。

共起ネットワークとは、前述した類似度行列の計算結果を視覚化したものである。KH Coder の作図では、コードに含まれる段落の数は円の大きさに、関連性の強さは軸の太さに対応している。

IV. 考察

本研究の目的は、総合的学習を学校全体で推進してきた高等学校の校長及びミドルリーダー教員にアプローチし、同学習を活性化させるために担った役割とそこでの

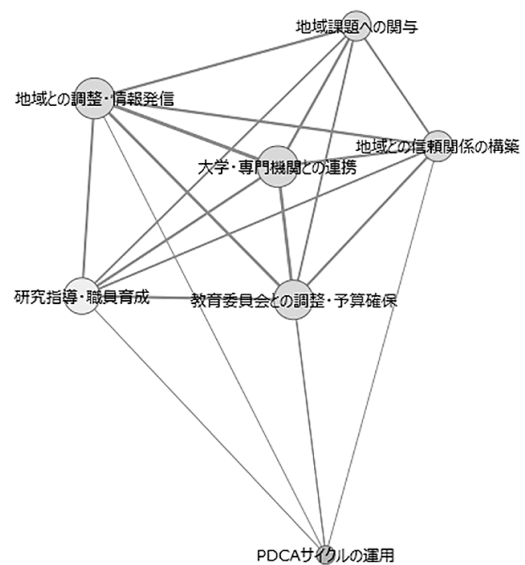


図1 共起ネットワーク（校長）

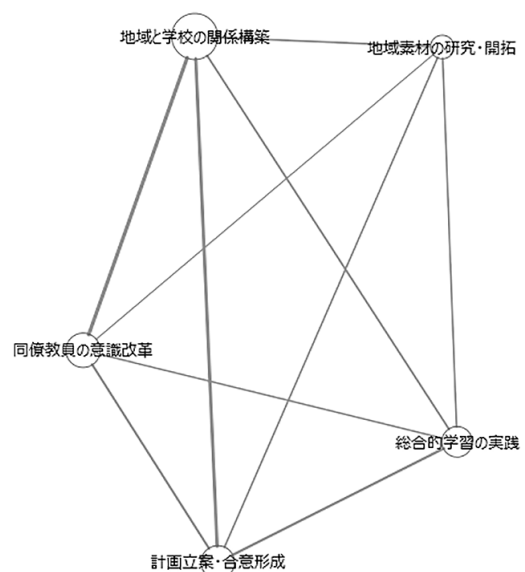


図2 共起ネットワーク（ミドルリーダー教員）

具体的な取組を明らかにすることであった。

計量テキスト分析の結果、校長については、地域が抱えているオーセンティックな課題に関与する中で、大学・専門機関との連携、地域との調整・情報発信、教育委員会との調整・予算確保の3つの役割を主に関連させながら、自校の総合的学習の活性化に取り組んだ様子が示唆された。

また、ミドルリーダー教員については、地域と学校の関係構築を中心にして同僚教員の意識改革や計画立案・合意形成を役割として担いつつ、教諭として総合的学習の実践に携わった様子が示唆された。

I「目的」で前述したように、高等学校では現在、総合的探究をスタートさせている。本節では以下、学校全体として総合的探究を推進するための汎用的な知見を得ることを目指し、III「結果」で得られた分析結果を先行する文献に照らしながら考察する。

1. 「地域」を総合的探究のテーマにする

1) 学校と地域の事情と思惑

本研究の研究参加者である校長及びミドルリーダー教員は、総合的学習の推進に当たって「地域」との関係構築に尽力したり、「地域」を探究課題とした教育実践に取り組んだりしていた。このことは、発話で「地域」という語が頻出（校長10位、ミドルリーダー教員6位）したり、コードの分析結果で「地域」に関連するコードが頻度や共起性において主要な位置を占めていたりした分析結果から確認される。

高等学校学習指導要領「総合的な探究の時間」では、探究課題の例として「地域や学校の特色に応じた課題」を示すとともに、内容の取扱いに関する配慮事項として「地域の人々の協力も得つつ、全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制について工夫を行うこと」と規定している。文部科学省においては、その趣旨について「総合的な探究の時間は、保護者をはじめ地域の専門家、大学や企業など外部の人々の協力が欠かせない。この時間を豊かな学習活動として展開していくためには、地域の人々を積極的に活用することが必要である」¹⁰⁾と解説している。

小・中学校での総合的学習と比べると、高等学校では教科の学習内容から派生した課題を設定し、生徒を教室の中だけで探究させがちになることは、研究参加者の多くが指摘していた。こうした傾向にある中で「地域」を探究課題とし、「外部の人々」と連携・協働する総合的学習に取り組んだ背景には、研究参加者の勤務校が学校の特色づくりに腐心していたという事情があった。

具体的には、「やっぱり特色がないと、同じ普通科高

の中では今後生き残っていけないだろうと。そうした中で何かできることがないかというふうに考え」（校長）た学校の思惑と、「過疎化もあって、やっぱり地域の生き残りもかかっている」（校長）地域の思惑とが一致した結果として、地域ぐるみの総合的学習が推進されたという事情である。

学習指導要領の作成に文部科学省の担当官として携わった田村は、「小中と比べて、統廃合は大きな要因です。……総合学習をいかにオリジナルなものにして、学校の教育目標とシンクロさせてやっていくかということは高校にとって非常に重要になってきます」¹¹⁾と述べている。総合的探究で取り扱う課題は様々に考えられるけれども、小・中学校の発展形として「地域」を課題とすることは、田村が指摘する「オリジナルなもの」にしやすくなるし、本研究の分析結果から確認されるように学校全体として総合的探究を推進しやすくなる。

また、「地域」を探究課題とすることは、「社会に開かれた教育課程」の編成と実施を求めている学習指導要領の趣旨にもかなうことである。「地域活性化はきれいごとじゃなくて、地域が元気にならなければ自分（地域住民）が生活できない。真剣さが（学校の教員とは）違うんです。その人たちに触れさせることで、生徒はやっぱり変わりますね」というミドルリーダー教員の発話は、学校と地域の間で交錯する大人の「思惑」とは別に、生徒が地域でオーセンティック（真正）な学びを経験することができる意義の大きさを示唆している。

2) 実践上の課題と解決策

「地域」を探究課題とすることは、メリットや意義が認められる一方で、実践上の課題があることも研究参加者の発話において確認された。

その1つは、学校と地域で異なる「思惑」から生じる両者のすれ違いである。「地域の人たちには地域の人たちの願いとかがある。それと私たちが考えていることが微妙にずれたりすることがあって、そうするとお互いに何かうまく、何か腑に落ちない感じで進んでいくことが得てして起こり得る」というミドルリーダー教員の発話に、その課題の所在を認めることができる。

もう1つは、校長による「地域との信頼関係の構築」やミドルリーダー教員による「地域と学校の関係構築」が、しばしば地域住民との会合や宴席で行われていたことである。「そうしなきゃ地域活動できないと思いますよ。……膝交えて話して向こう（地域住民）も本当に心を開いてくれるっていうか、それはとても感じましたね。だから多分（関係構築は）学校じゃできないと思いますよ。だからって（校長が職員に）『じゃあ飲み会に行き

なさい』なんてできないじゃないですか」というミドルリーダー教員の発話に、その課題の所在を認めることができる。

それらの諸課題を解決していくために稲井は、「やはり（高等学校の）教員は機会を見つけて地域に出かけていき、地域の人たちと関わるようにしたいものである」としながらも、「積極的に自校の取組をウェブサイトやSNSで発信する」ことや「外部の人たちにカリキュラムづくりに参加してもらったり、教育活動に積極的に関わってもらったりする」ことを提唱¹²⁾している。

また、教諭として「総合」を指導している茂木は、地域住民と協働して学校と地域を「コーディネート」することを目的としたコンソーシアムを設立した。茂木は、コンソーシアムが学校と地域の「アクター（翻訳者）」となってお互いの「立場と文化」を翻訳することで、「学校と地域との連携・協働による世界の境界を拡張すること」が可能になると提唱¹³⁾している。

稲井や茂木による提唱は、「社会に開かれた教育課程」において総合的探究を持続可能とするためのタクティクスとして受け止めることができる。

2. 外発的要因によって総合的探究を推進する

本研究の研究参加者である校長とミドルリーダー教員は、総合的学習の推進に当たって、これまで述べてきたように学校の外に働き掛けるだけでなく、学校の中への働き掛けも並行して行っていた。具体的には、校長による「研究指導・職員育成」であり、ミドルリーダー教員による「同僚教員の意識改革」である。これらはいずれも、学校のトップリーダーとミドルリーダーが学校全体で総合的学習を推進するために行った役割である。

曽我は、総合的学習を推進するリーダーが行っている「協働のためのリーダーシップ」を、中・高等学校の教員を対象としたアンケート調査の分析に基づいて考察している。その結果、高等学校の総合的学習に関しては、リーダーから同僚教員への「助言」が学校の教育目標との関連において「やや控えめ」に行われていること、リーダーの視点から見た総合的学習を推進する「組織力」が「校務分掌での役割の明確性」「『報・連・相』の手続き上での合理化」「学年のまとまり」の3点から構成されることを明らかにしている¹³⁾。曽我によるこれらの指摘は、本研究でのミドルリーダー教員が総合的学習の推進に向けた「同僚教員の意識改革」を「計画立案・合意形成」と関連させながら行っていたことと並行するものである。

その際、ミドルリーダー教員は、「同僚教員の意識改革」を「地域と学校の関係構築」を媒介にして行っていたこ

とに注目する必要がある。すなわち、「意識改革」を教員の内発的動機に訴えるのではなく、地域という一種の外発的要因を利用しながら行っていたのである。

研究主任を務めている中西は、「学校改善には内発的 school 改善のほうが有効である」という先行研究に理解を示しつつも、「高等学校においては学校特有の組織文化の影響が大きく影響し、教員個々の内発的意欲や内発的 school 改善に委ねているだけでは学校変革は難しく、一時的に意識が高まってきてもすぐに現状に戻ってしまう懸念も大きい」と指摘している。そして、「学校変革の端緒においては外発的 school 改善の方法をうまく取り入れることでより一層推進することができる」と指摘している¹⁵⁾。ここで中西がいう「外発的 school 改善の方法」とは、例えばSGHやSSHなどの研究指定、学校・学科等の再編、管理職によるリーダーシップなどである。そして、外発的要因を利用することで総合的学習が推進できることは、本研究でも「外部環境も併せてやった方がいいなっていうふうに判断したんですよ」（前掲）や「文部科学省の道徳教育の研究指定を受けたんですね。どうせならもうそれにみんな絡めちゃおうって」という校長の発話や、「私は本当に先生方に熱意を持ってきてくれる（地域の）人が現れたらいいなと思ってます……外部の力を使って動かしていくって方法もあるのかなって考えています」というミドルリーダー教員の発話に認めることができる。

総合的探究を推進する端緒を外発的要因に依拠したり、依拠するふりをしたりすることは、総合的探究を活性化させるための戦略に位置付けることができる。すなわち、外発的要因はタクティクスであり、本研究で校長やミドルリーダー教員が担っていた役割についても、戦略に位置付くタクティクスとして捉えることができる。

3. 研究の限界

研究参加者について、校長もミドルリーダー教員も5人ずつという限られた人数であった。

また、同一校に勤務していた校長及びミドルリーダー教員は1組であり、それ以外は異なる学校での異なる取組をインタビューする形となった。そのため、総合的学習を学校全体で推進する際に校長及びミドルリーダー教員が連携・協働して行った取組は何かについて、計量テキスト分析で明らかにすることができなかった。

さらに、仮説検証的な分析において、コードに含まれない段落が校長で5割、ミドルリーダー教員で4割残った。コードの数を増やしたり、コードを構成する抽出語を調整したりして、総合的学習を推進した際に担った校

長及びミドルリーダー教員の役割をより多角的に分析する必要がある。

V. 結論

高等学校の総合的学習を活性化させる校長及びミドルリーダー教員の役割は、次の通りであった。

校長は、大学・専門機関との連携、地域との調整・情報発信、教育委員会との調整・予算確保、研究指導・職員育成、地域との信頼関係の構築、地域課題への関与、PDCA サイクルの運用の7つであった。

ミドルリーダー教員は、地域と学校の関係構築、同僚教員の意識改革、計画立案・合意形成、総合的学習の実践、地域素材の研究・開拓の5つであった。

校長もミドルリーダー教員も、総合的学習を学校全体で推進するに当たっては、地域との関係や信頼の構築に尽力し、地域を探究課題とした教育実践に取り組んでいた。

付 記

本研究は、日本生活科・総合的学習教育学会第29回全国大会（山梨大会）の「自由研究発表」第7分科会においてオンライン発表したものを文章化したものである。

謝 辞

本研究はJSPS 科研費JP18K02551の助成を受けたものです。インタビューに御協力を頂いた各位に感謝申し上げます。

文 献

- 1) 中央教育審議会：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申），文部科学省，東京，2016年，p236，p240.
- 2) 曾我悦子：高等学校における総合的な学習のカリキュラムマネジメントの組織力を規定する条件の研究，飛梅論集，2016年，16，pp81-96.
- 3) 小見まいこ：新潟県の探究学習実態調査報告書 NIIGATA 探究白書，初版，みらいず works，新潟，2020年，p6.
- 4) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成30年告

示）解説 総合的な探究の時間編，文部科学省，東京，2018年，pp3-4，p120.

- 5) 中央教育審議会：これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について一学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて―（答申），文部科学省，東京，2015年，p3.
- 6) 樋口耕一：計量テキスト分析における対応分析の活用―同時布置の仕組みと読み取り方を中心に―，コンピュータ & エデュケーション，2019年，47，p18.
- 7) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―，初版，ナカニシヤ出版，京都，2014年.
- 8) 樋口耕一：KH Coder 2.x リファレンス・マニュアル，KH Coder 付属文書，2015年，p31.
- 9) 牛澤賢二：やってみようテキストマイニング―自由回答アンケートの分析に挑戦！―，朝倉書店，東京，2018年，p91.
- 10) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編，初版，文部科学省，東京，2018年，p58.
- 11) 田村学，廣瀬志保（編著）：「探究」を「探究」する―本気で取り組む高校の探究活動―，初版，学事出版，東京，2017年，p175.
- 12) 稲井達也（編著）：高等学校「探究的な学習」実践カリキュラム・マネジメント，初版，学事出版，東京，2019年，p18.
- 13) 茂木和佳子，松本健義：SGH プログラムにおける地域連携・協働による探究型学習の事例研究，上越教育大学研究紀要，2020年，39(2)，pp371-384.
- 14) 曾我悦子：総合的な学習のカリキュラムマネジメントに関する実証的研究―中学校・高等学校におけるカリキュラムの連関性とそれを支えるマネジメントの協働性との条件に関する考察―，せいかつ&そうごう，2017年，24，pp44-53.
- 15) 中西美香：高等学校における教員の協働づくりと学校変革に関する事例研究―活性化委員会の設置を通じた約4年間の変容過程を通して―，佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要，2020年，4，pp194-217.